

国語方言上の一長音現象

(「子」を「コー」と言うのなど)

藤原与一

はじめに

日本語を今日の諸方言について見る時、その方言音上に、種々の長音現象が見いだされる。中で一つ、大きな問題となるのは、語詞の音相上の、音節の単純長呼である。たとえば一音節語で、「子」を「コー」〔kɔː〕と発音するの類である。音節の長呼は、つまり、その開音節を形成する母音(母韻)を長呼するものである。そこで、主題の長音現象は、音節の母音を長呼して発音する現象と言うことができる。さて、たとえば「子」で、〔kɔː〕の発音がなされるようであれば、それは通常、二拍の長さであって、「コー」と表記されることが適當である。

「子」〔kɔː〕、「蚊」〔taː〕などの、一音節名詞の長呼は、由来、但馬などを除く近畿地方(——それにつづく北陸西部)と、四国地方とに隆盛である。その状況の一般は、拙著「日本語方言の方言地理学的研究」(一九五六年)の図版、Fig. 15「蚊」でも、見ていただけるはずである。

これら諸方言のほかには、日本語の諸方言で、一音節語の長呼現象は、だいたい、みとめられないように、従来、一般には、理解さ

れている。——散発的な現象は別として、一定傾向と見られる程度の一音節長呼現象は、他方言については、ほとんど指摘されていない。(南島のことは、しばらくおく。)

ところで、昭和三十七年八月、肥後天草島を調査したところによると、天草下島内部には、一音節語長呼の、いちじるしい傾向がみとめられる。さいしょ、これに接した時は、すくなくらずおどろかされた。しかも、調査をはじめたものが見いだされたのである。一音節語名詞にとどまるものではないことが見いだされたのである。諸品詞にわたり、諸音節語にわたって、音節長呼(CVː)の現象が見いだされた。これらは、たがいに寄りあった、総体的な長音現象だったのである。一音節語の長呼は、その一大長音現象の圈内の、一事象だったのである。このような事態、状況は、四国方言・近畿方言などには見いだされない。この点で、当方言のこの総体的な長音現象は、かくべつに、私の注意をひいた。四国近畿にこれほどのものが見いだされない以上、このこの現象は、全国的な見地でも、注目されてよいものと言える。(一音節語長呼のある南島でも、ここでのような総体的な長音現象は、見いだされないのでは

ないか。)

天草下島西南岸「大江」方言の長音現象

私が右の事実を調査し得たのは、天草下島の西南岸に位する一村落、大江である。この村は、一つの大きな谷あいの特立して、背後の高地から、海辺の低地にわたっている。その地形と集落様態とに支えられて、当村の言語状態は、まさに一方言をなしている。この方言に、私は、上記の事実を見たわけである。

天草下島内部の他の小方言を順次精査していくならば、どのような事実が見いだされるであろうか。私が以前に天草下島を踏査したおりの概観調査では、島の南端でも東北岸でも、また西岸一地で、これほどの長音現象は聞かれなかったように思う。ただ、こういう概観は、あくまで表面的な調査にとどまる。「大江」方言でのような現象が、今後、天草下島内部で、どのように見いだされ、あるいは検討されていくか、私はそれに強い関心をよせないではない。

○私の「大江」方言調査 37・8・9-16

これは、当方言の方言生活を、そのままとまった方言色に即して、全一的にとらえようとした調査であった。(右の期間で、日常ぶつりの発音生活・表現法生活・語詞生活を、ほぼとらえることを目的としたのである。)できるだけ文表現本位に、方言事実をとらえることにつとめ、カード二二八枚を記録した。

○調査法

調査法は、自然傍受法と称しているものを本体とした。自然傍受法は、会話の自然状態を、傍受するこちで、ものを捕捉していこ

うとするものである。調査計画は、内に用意している。(質問調査法ということばを借りて言うならば、自然傍受法は、あらわに質問することをひかえる質問調査法である。)このような調査法による調査の全過程で、しぜんのうちに捕捉されたのが、問題の長音現象である。

○意図的把握と自然把握

以下にとりあげる資料の全体は、すべて、右のような調査全過程の中で、しぜんととらえられたものである。いわば、自然把握の資料である。もしも、語例をあげて、積極的に質問していったら、もっと多くの実例を得ることができたであろう。が、私は、そうはしなかった。自然把握の資料が、この程度に多く得られてきたので、問題の事象の世界と重大さとは、よくとらえ、かつ認識することができたからである。(自然把握のこの純粹資料の絶対性は、すでにはっきりとしたものだった。)

全調査過程中、私は、つねに、この長音現象に、一つの注意を向けていた。そして、自然把握の範囲で、調査の完結を期そうとしていた。

質問調査によって、意図的に把握した資料(この長音現象の)

と、自然把握の資料とは、厳密に言うと、等質でない。ことに、質問調査では、——それも、多くの語例をとり立てて機械的に問うていたりすると、時に、被調査者は、その場の応答心理で、偶発的な長音化を示したりせぬこともない。微妙な発音の問題であるだけに、そこに、機微な現場の偶然もおこりがちである。(いったい、発音の長短など、「長いか短いか。」などと聞いた時は、あてにならない答えの出ることが、存外、すくなくない。知識人からでもあ

コメ | ショテ | ノコ | カ | オ | ジ | オ | ク |

米 | 初 | 鋸 | 舵 | 沖 | じ | お | 火 |

ハ | ヘ | ニ | ソ | イ | サ | カ |

一 | リ | ワ | コ | イ | タ | ゲ |

鉢 | 辺 | 土 | 底 | 家 | 里 | 蔭 |

自家 | さ | 煮 | 田 | 童 | フ |

オ | タ | イ | オ | タ |

ナ | タ | タ | タ |

同 | 田 | 田 | 田 |

オ | タ | タ | タ |

同 | 田 | 田 | 田 |

同 | 田 | 田 | 田 |

3、三音節語

4、四音節語

5、五音節語

ヒ | コ | ト | ガ | マ | シ | ヤ |

ひ | こ | と | が | ま | し | や |

「コクシエンヤ | トラガリジャ | せわしくて、そぞろしいこと。」

マ | ツ | ヤ | マ | シ | ガ | ネ | ダ |

マ | ツ | ヤ | マ | シ | ガ | ネ | ダ |

十 | 日 | 練 | り | (| 砂 | 糖 | を | 造 | る | の | に |)

野 | 菜 | 畑 | ガ | ネ | ダ |

ヤ | シ | ヤ | バ | タ | ケ |

野 | 菜 | 畑 | ヤ | シ | ヤ |

サ | ル | コ | シ | カ | ケ |

さ | る | の | こ | し | か | け |

土 | 田 | さ | ん | た | ち | ツ | タ | サ |

二、代名詞

ダ | イ | ワ | ガ | オ | マ |

だ | い | わ | が | お | ま |

「対称」 | 「対称」 | 「対称」

ト | イ | イ | チ |

ト | イ | イ | チ |

一 | 一 | 一 | 一 |

一 | 一 | 一 | 一 |

7、七音節語

6、六音節語

四、動詞

一、二音節語

ミール 見る

シーきらん しきらぬ

クール 来る

イクーで 行くで

食てミーズに

クメーば 組めば

モータ 漏った

ユワーば 言わば

モターザ 持たず

2、三音節語

オクール 起きる

ウグール 受ける

ノシエーて のせて

ヤメーて やめて

アイベーば あゆめば

タテーて 立てて

サセーて させて

ツケーて つけて

カカレーば かかれば

タンネーて たずねて

3、四音節語

ヨカー 多い

オーカー 多い

トール 取る

ジャール である

ミーに 見に

タテーば 経てば

タール 足る

モータンば 漏らねば

ナール 成る

ヤール やる

ミニール 見える

ナグール 投げる

ああシトケーば

カケーて かけて

ウシエーて のせて

アデーて あげて

ノシエーて のせて

ゴザース ござす

サブグルル さはくろはかどる

ジャカー ちがう

六、助動詞

……ヤリヤース。

……ジャール。

……タベサセターリ。

……クサトツターイ、

ハジカカシエラレーデ、

ハヨーミローゴタール、

シランジャツタート。

七、助詞

ひるカーラ(イ)

わたヨ

ヨーバ

アスベバ ヨカトニーマー。

ナガカトニー

シヤーイエン。

イイエーゴトニー

ユージシヤーキヤー

ハツボンジャツデーガー。

……デীগ、

八、文末詞

ナンキヤーイ。

……バィ。

やりヤス

じゃろ

食べさせたり

草をとったり

恥をかかせられて

早く見たい。

知らなかったのです。

ひるから

綿を

くをば

「長いのに、まあ、あそべばいいのに、まあ。」

しは得ぬ。

家ごとに

用事さえ

初盆じゃで。

から

何かい。

何なにバィ。

九、副詞

マード	まだ	マード	また
イートキ	いっとき	トキドーキ	ときどき
ズルト	ずっと	イキナリ	いきなり
オモニ	おもに	ウ(オ)カツニ	うつつて うつつて うつつかり

十、特殊文形

コーラ。	こちら。	ハイラ。	ほら。
ドール。	どれ。	ハイイ。	はい。

以上の全実例を通観すれば、当方言に、長音現象の、ある體体的なもの、いわば体系的事実が、発音生活の一特殊相として存在することが、肯定されよう。

○長音法則

この方言に、右のような長音現象は、一定の法則的事実として存在していると思われることができる。さて、どのような傾向が帰納されようか。

I 名詞について見るのに：

▽第一音節が低音の時は、そこに長呼はない。

▽アクセント上の高音のある音節で、——それが何音節めにあるものだろうとも——、長呼がある。

▽高音音節の母音が長呼された時、アクセント高音が、つぎの音節へつづく場合と、つづかない場合とがある。——つづく場合の方が、そうとりに多い。

▽アクセント高音部後の低音部音節(もとより、右の長呼低音を除き)で、長呼のあることは、ごくすくない。「ムカーシ」などが、ほとんど例外的に見いだされる程度である。()

▽長呼を母音別で見れば、「e」母音の長呼されることがもつとも多く、「o」母音が、低くその次に位する。「e」母音は、さらにおちる。

▽長呼を受ける音節は、さまざまの母音のものでありうる。

I 動詞についても、名詞についてと、ほぼ同じことが言える。

○長呼事情

「大江」方言での右のような長呼事態を、一体の事実として観察する時、長呼の成立について、現在時での、なにほどの推測が、できないではない。人に対するもの言いの末尾、文末では、しぜん長音化がおこりやすかったか。文末詞「かい」が「キヤイ」となるのなど。相手に訴えようとすると、しぜん、こうもなりがちであろう。文末詞でなくても、文末部分「じャろ」は「ジャロー」となる。「やりヤス」も「やりヤース」など。

強調表現によって、長音化のひきおこされることが、かなり多くはなかつたのか。(文末の長音化も、一種の強調表現と見られる。)肥後方言などでの、「ほんとにー」と強調する態の「ホンナ コーッ」も、ここに参考になる。文が名詞とめであれば、その名詞上にも、文末強調の長音化がおこりうるわけである。つぎに、「名詞+をば」が「ーョーバ」と長音になるのも、一種の強調表現によるものと見られはしないか。そんな強調表現が習慣化すると、長呼形式が単語の形式としてもおちつく。

強調でなくても、ある前後関係の中では、しぜん長呼されるといふようなことがあつたかもしれない。前後関係という着眼が、一つ有効かもしれない。「中で」が「ナカーで」となるなど、助詞とのつながりあい、かくべつ強調というのでなくとも、長呼がお

き、それが習慣化することもあったか。

長呼事情についての、今なりの、自由な推測は、してできないことはない。

さて、このような成立観は、この「大江」にかぎらず、他の方言についても、おしあててみる事ができる。そういう点から、私もは、九州方言の他の地域に、問題の長音現象があつても、ふしぎとはしないのである。

さてまた、一音節名詞の長呼が、上例のように現存している事実からすれば、それを含んだ総合的な長音現象を、そうそう新しい生成のものとする事はできないであろう。一音節語の長呼は、文献上でも、すでに早くから見えていることである。

○むすび

「大江」方言では、長音現象の総合的な世界がみとめられる。私どもは、このまとまりの、存在と特殊性とを、國語事実として問題にしたい。

「大江」以外には、このようなことは見いだされぬか。

長音現象の分布

天草下島内部のことは保留する。(——この島は、問題の要地としておかなくてはなるまい。) 肥後本土にかえてみると、はたしてそこに、「大江」方言のに似た状況が、見いだされたのである。私の調査では、今、一・二の地点を明らかにし得ているにすぎないが。

一つに、肥後飽託郡(熊本市をとりかこむ郡)下の調査で、問題の事態を見いだすことができた。同郡天明村(古閑)熊本市の南方

にある。)の方言人、渋谷多文氏の、広島市で教示してくれたところによれば、同地方言では、まさに、長音現象がさかんである。

同氏には、「大江」方言での実例の、上掲のもの全部を提出して、これを順に見てもらい、こちらからあらわな質問をしつつ、一定要望のもとで、一々を発言してもらった。この調査は、文字どおりの質問調査である。この調査で、同氏が長音現象を示し、かつはそれを確認した実例を、つぎに全部かかせる。(文、またはそれに近い形で記述することにしたのであるが、今は紙面をおしむほかはない。)

一、名詞

1、一音節語

マ	マ	エ	カ
イ	エ	ト	チ
コ	ミ	キ	キ
ハ	メ	ケ	
テ			

2、二音節語

ヒ	ヒ	ウ	ヒ
ク	ウ	ト	ヒ
バ	ウ	ト	
ヤ	ウ	ト	
カ	ウ	ト	
マ	ウ	ト	
ハ	ウ	ト	

I、二音節語

キール
ミール
トール
クール
タール

タテ一ば
クメ一ば
モーラにヤ
ナール、ナル

2、三音節語

ウクル、ウクル ナグル、ナグル ノシエ一て、ノシ
エチ ヤメ一チ、ヤメチ カケ一チ、カケチ ウシエ一
チ タテ一チ、タテチ アゲ一チ、アゲ一チ サセ一チ、サ
セ一チ ノシエチ、ノシエ一チ ツケ一チ、ツケチ

3、四音節語

タンネチ、タンネ一チ サバクル、サバクル

五、形容詞

ムゾ一カ

六、助動詞

……ラレ一チ、ラレチ ……ゴタ一ル

八、文末詞

バイイ、バイ

九、副詞

マ一ダ マタ、 マ一タ イ一ツトキ ト一キドキ
イキナ一ル (いきなり) オモ一ニ ウカ一ツニ

十 特殊文形

タービ

ウース

ヘーリ

カーゲ、カゲ

3、三音節語

オナージ

オクワ一シ

4、四音節語

スモドル、スモド一ル

5、五音節語

マツヤマシ一

7、七音節語

サーンノコシカケ

ツツタサンターチ、ツツタサンタチ

二、代名詞

メ一ル

ナーン

ドガ一シコ、ドガシコ

三、数詞

ヒト一リベツカリ

ヒトニギリス一ツ、ヒトニギリスツ

一 ジューネンゴ一

ア一シ

ハ一チ

カージ

クワ一ジ

ターカル

ムカ一シ

イ一ツ

ワガ一、ワガ

イチミヤ一ズツ、イチミヤ一ズツ

ココノ一ツ、ココノツ

ニ一ジユ、ニジユ一

ゴジユ一、ゴ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コ

コーラ。ハイ。

以上のように、長音現象のみとめられるものが多い。(一音節語の場合を含んで。)

ものによつては、長音のあるのとないのとの、二種の形がある。その長音のあるのは、広い意味での、強調の時、というのが、かなりある。たとえ強調の時にもせよ、その時に長音の出る習慣があるのは、それが無いのと、大いにちがう。そういう習慣のある地域は、それとして、大いに注目される。

渋谷氏は、自己方言について、のびる傾向が強い。と言われ、かつ、氏は、若い人よりは年よりの人にこの傾向の強いことをみとめられた。また氏は、氏の郷里「奥古閑」の近隣のことについて、のびる人から聞かれたら、近辺みな、だいたいのびると答えない。と述べられた。なお一つ、付記すべきことがある。これほどに注意ぶかく考えようとされる氏が、時々質問されていると、「のびる」と言いたくなる。と、被調査者の微妙な心理傾斜を告白されたのである。質問調査の方法を、慎重にととのえなくてはならぬことは、ここに明らかであろう。

飽託郡下の調査については、南方の八代市域について、一調査をこころみることができた。調査方法は、右の場合に類したものであり、被調査者は、白石寿文氏である。この人の発言では、つぎの程度に、長音現象があつた。

イ	エ	家	ベ	リ	辺	ダ	イ	(レ)	だ	れ
カ	コ	ノ	ツ	九	ツ	モ	タ	イ	持	た
カ	多	い	ミ	ジ	ョ	カ	愛	く	る	し
									い	……
										ゴ
										ダ

ール ……したい ナンカトノ 「長い」の

シャキキヤイ しさえ ナンキヤイ。 何かい。

シランバライ。 知らんわい。 マーダ まだ

コーラ。 ころ。 ホーラ。 ほら。 ドーラ。

どれ。 ハイ。 はい。

ここでは、一音節語長呼の事実が、ほとんどない。それはなくて、爾余の場合に、右のように、長音現象が見えている。

この程度ではあるが、それにしても、ここが、多少とも、問題の地でありうることは、あらそわれないであろう。

以上の肥後二地点をよりどころにして、順次、他地を検討していいたら、どんなことになるか。肥後内部は、問題の地域として、追求していかなくてはならないと思う。

鹿児島県下となると、長音現象は見えない。このたびは、右同様の質問調査を、薩摩北部出身の井上親雄氏と、薩摩東南隅出身の瀬戸口俊治氏とにこころみた。いずれも、概括して言えば、長呼の習慣を持っていない。一音節語にかぎってもである。

転じて、佐賀県小城町出身の相原和邦氏について右の質問調査をこころみたところ、氏からは、つぎの長呼例が得られた。

シ	キ	ら	ん	コ	マ	カ、	コ	マ	ー	カ
ム	ゾ	ー	カ	マ	ー	ダ				

熊本県下との、多少の似よりがみとめられよう。

佐賀県以上に、熊本県下からはなれて長崎県方面になると、たとえ佐世保市域でも、長音現象は、あまりないらしい。佐世保市出身の田原勇氏について、右の質問調査をおこなった結果では、長

上、重視すべき分布とされる。

近畿北陸の一音節名詞長呼は著明である。近畿に、二音節名詞では、

アメー 雨 クモー 蜘蛛
カキー 牡蠣 アサー 朝

などの発音がある。アクセントに関連の深いものようであるが、ここにもたしかに長呼がある。「アメー」のようなのではない。三音節以上の名詞には、近畿に、長音現象は見られないのではないか。「着いて」のような言いかたも、しないのがふつうかと思う。近畿では、もっぱら、限定的な長音現象がさかんである。

ところで、北陸西部にいくと、二音節名詞での、「アーンシ」(足)のような長音現象が聞かれる。近畿をはさんで、東西に、こんなことがある。

結 語

1 主題の長音現象は、国語諸方言にわたって探索してみるのは、方言しだいでは、これが、諸音節語にわたり、諸品詞にわたって、体系的事実として存している。

※動詞にあることなど、大いに注目されてよい。

2 右のような状況と、それに類し、またはつながる状況とが、複雑に関係して、国語諸方言上に、広い分布を見せている。このことが、長音現象の、国語事実としての一重要性を思わせる。

3 長音現象の分布で、体系的事実を示すことの弱い状況の場合、そこに、一音節語長呼に偏したものと、一音節語長呼は示さないで、他での長呼を示すものがある。しかもその両事態は、前項

でもふれたように、根底的には、つながったことと思われる。

四国近畿などの特定のな長呼現象は、由来これだけのものだったのか。それとも、多種あったものがこれだけになったのか。そういうことは、今、考えにくいとしても、一音節語長呼は、事実としては、總体的な長音現象の中で理解されてよいもののように思われる。さらに言うならば、四国近畿地方の長呼は、全国的な、広い視野の中で、関連事象を統合した考察のもとで、理解されなくてはならないものように思われる。

4 右の諸条は、すべて、長音現象の成立史にかかわっている。(非体系的存在は、あり得た体系的事実の断片かもしれない。偶発のものも、あるとしても。)總じて、長音現象の分布が、国の西半方面にいちじるしいのも、見のがしてはならないことのように思う。

5 史的考察のために逸してならないのは、南島方言内の諸事情である。南方では、奄美群島以南で、一音節名詞の長呼や、二音節以上の名詞内での長音現象が、かなり見られる。「名」は「ナ1」、「世話」は「セーベ1」など)

上来の長音現象分布に、この南島の分布をあわせて、長音現象の成立を考察する時、一音節語長呼の古い文証もあることであり、總体的には、この現象の成立は、新しくないだろう、と考えることができようか。地方によっては、また、ものしだいで、随時、これを新しく成立せしめたこともあったろう。

6 今後、世代の更改とともに、この現象は、衰退することはあっても、盛大になることはないであろう。(三七・一二・一一)

—— 広島大学助教 教授 ——